



# 政務活動報告書

令和 6 年 3 月 29 日

代表者氏名	川合 滋 	記録者氏名	足立 淑絵 
活動者氏名	幸松孝太郎 足立淑絵		
活動日	令和 6 年 2 月 3 日(土)		
活動先	・伊那市立伊那小学校(長野県伊那市山寺 3221 番地)		
活動目的	・公開学習指導研究会「内から育つ」 ～自らの歩みの中で、思いが溢れ出る子ども～		



★公開学習指導研究会「内から育つ」—自らの歩みの中で、思いが溢れ出る子ども—

○人間的営みとしての「総合」の学び

1. 教育現場とICT(新任教師のコメントなど)

- ・ICT はインスタントで確かに便利だが、じっくりと考える場・時間・行為を奪う道具ともなりかねない。
- ・「人がわかるとは？」「人が学ぶとは？」といった根本的な問いに蓋をして、「情報を得る＝わかる」という大前提になっている気がする。
- ・ICTのデジタルな世界では、いつのまにか教師の自分自身、子どもに対する捉え方が表層的になっていくような感覚がある。
- ・言葉の変容は考えの変容であると言えるが、何も語らず何も書かない子も、深く思考しているからこそ言葉を表出できないかもしれない。目に見えなければ無かったとしてしまう見方は恐ろしいのではないか。
- ・社会の中で、上手に情報を借用して体裁よく生きる子どもが育つことで、「私が失われていく教育」が行われているのではないかと思う。
- ・ヒトラーは、人々の心を捉え、人々の怒りを掻き立てるようなスピーチの練習にとっても力を入れていた。同時代のガンジーは、自分の生き方そのものが自分のメッセージであると考え、スピーチの練習は全くしなかった。それぞれの考え方に「人の豊かさとは何か？」という問いの1つの答えが示されているように感じる。

※「沈黙」という人間的営みが蔑ろにされる事態が生まれ、簡便に借用する学びが横行することもまたICTの影である。

2. 「総合」は子どもと教師がつくるアート

- ・技術的アプローチでは、学習は予め定義された自己完結的で非文脈的な知識、技術、気質、態度の習得とみなされ、教授のカリキュラムの最終目標が予め設定される。技術的アプローチに触発された教育者は、社会的に重要な知識、技能、態度、価値観など、生徒の将来に無限の可能性を開くような強力なツールキットを身に付けさせることで生徒に力を与えたいと考えることが多い。しかし、こうした教育者達は道具を道具たらしめているのは個人の欲求であることを忘れていた。個人の人間的欲求がなければ、道具は死んだものである。 (By.デラウエア大学 ユージン・マツゾフ)

- ・教えることはアートであり標準化された技術ではなく、教師と生徒の作者性に基づく一種の「パフォーマンスアート」である。このアプローチによる教育は、生徒と教師の主体性の変容を伴う。(By.デラウエア大学 ユージン・マツゾフ)
- ・伊那小学校の実践の根底にある「内から育つ」という教育観は、ミハエル・バフチンの思想に基づく対話的授業、材をめぐる子どもと教師が「共につくる」授業観とも重なる。
- ・教育観における授業は「アート」と表現しているように、刹那の子どもの思いや時に予想外の出来事の中で再構築されながら展開していく。そうした展開において、マツゾフ氏が「生徒と教師の主体性の変容」と表現するように、子どもの主体性のみならず教師もまた一探求者として、発見や感動を伴う出来事を重ねながら変容していく。

### 3. 体験の意義 —意味がないことに意味がある—

#### ☆活動フィールド「湧き水の森」

生徒：7月の暑い日。飼育しているヤギたちと学校から少し離れた湧き水の森に出掛けた。森の中はひんやりとしていた。ヤギ達に声を掛けながら散歩する子。小川の水をかけ合って遊ぶ子。用水の小さな滝で頭から水浴びをする子。またヤギ達の好物の草をザルいっぱい採っている子もいる。子ども達、そしてヤギ達もまたそれぞれに、やりたいことをやりたいようにやっていた。

先生：バッタやトンボなど夏の生きもの達と関わるおもしろさ、日差しが照り付ける中で入る水の気持ちよさ、夏の草花をヤギ達が頬張る横で自分も草花に包まれる心地よさ、子ヤギと原っぱを駆け回る喜びなど、時には一人、時には友達やヤギと、夏ならではのそれぞれの場を存分に感じて欲しい。

・遊びの教育的効果が前面に押し出されることによって、遊びが本来持っているはずの生成の力と奥行きが縮減し衰弱させられてしまう。遊びはもともと有用性の秩序から離脱する自由な行為であり、遊びは遊ぶために遊ぶのであって、遊びを超える目的はない。

・私たちは没頭して夢中になって遊んでいる時、いつのまにか「私」と私を取り囲む「世界」との間の境界が消えていくことがある。すぐれた体験は、自己と世界とを隔てる境界が溶解してしまう瞬間を生み出す。

・深い感動は言葉にならない。言語化の困難なところ、つまり意味として定着できないところに、生成としての体験の価値がある。深く体験することによって、自分を遥かに超えた生命と出会い、有用性の秩序を作る人間関係とは別のところで自己自身を価値あるものと感じることができるようになる。未来のためではなく、この現在に生きていることがどのようなことであるかを深く感じるようになる。「自己の尊厳」は、このような体験を母体に生まれる。

※深い体験は「未来のために～」手段ではなく、今そうしていることそのものに意味がある。  
外からの意味の限定化は、「私が失われていく教育」にもなりかねない。

※子どもの専心する姿を「熱気と集中」と「憩いと解け(ほどけ)」と表現する。森や林で自然に  
体を委ねる「憩いと解け」の姿の前提には、対象をめぐってこれまで積み重ねてきた「熱気  
と集中」の時と場がある。

#### 4. 認識と存在の重層的往還の中で

##### ☆動物の飼育の実践

事例：自己中心的な行動が目につく子どもが羊との関わりの中で、リードを握って引き回すようにして、羊を手の内に入れようと格闘してきた。しかし思い通りにいかない野生に出会いながら、次第に羊を分かっていく中で、その野生に即して関わるようになっていった。同時に関わりの中で羊への愛おしさを深めていったに違いない。この愛おしさを背景に、直面する様々な問題を自らまたは協働で解決しながら羊との暮らしを深めていく。

・「熱気と集中」の時と場は、自らの願いを実現するために、対象をめぐり、または動物の野生が客観的に「わかっていく」認識論的アプローチの中にある。同時に唯一無二の命としての愛おしさは、主観的感情を含み込む存在論的アプローチの中に育まれる。この認識論的アプローチと存在的アプローチの重層往還の中で動物と共に暮らしは深まってい

※「憩いと解け」の時は、子どもが専心する「熱気と集中」の時と場なくして生まれることはな  
い。

#### 5. 伊那小学校の特徴

##### ☆33年目を迎えた「内から育つ」教育

- ・子どもは本来、自ら求め、自ら決めだし、自ら動き出す力を持っている存在である。
- ・子どもの求めや願に立った学習を展開することで、子どもが元来持っている生きる力を更に育んでいく。
- ・総合学習(1・2学年)、総合活動(3～6学年)を中核として編成し、体験的かつ総合的な学びの中で、子どもと教師が共に創っていく授業の実現に向けて研究実践を積み重ねている。
- ・学校外へ出ていく時は、2人以上で行動すること。困ったら近くの大人を頼ること。
- ・学校外の活動で子どもたちが行きそうな場所には、事前に先生方がアポイントやお願いをされている。

※先生方が変われば学校の雰囲気が変わり、居心地が良くなり、子ども達が変わる。

◎所感◎

総合学習の時間に、これほどまでに伸び伸びとした子ども達と、子ども達と戯れる動物たちを私は今まで見たことがありません。多くの子ども達に囲まれた動物達は嫌がることもなく遊び、見た目は人間と動物ではあるものの友達のような感覚で過ごしていることを肌で感じました。

また先生と子ども達も、大人と子どもという括りの付き合いではなく、一人の人間同士として関わっていることも見て取れました。

私達は何事も言語化し理由や目的をつけたがりますが、もっと自由に大らかで伸び伸びと個性や天分を生かすことで、つながり支え合う心豊かな地域になるのではないかと思います。教育という根本を見直す時代が来たと感じました。

